

【教育ノート】

大学生のジェネリックスキルの経年変化

— 養護教諭養成課程における学生パネルデータを用いて —

治部 哲也*, 木村 貴彦*, 福田 早苗*, 池上 徹*

Time-course Changes in Generic Skills of University Students
— Using Student Panel Data in Yogo Teacher Training Course —

Tetsuya Jibu, Takahiko Kimura, Sanae Fukuda and Toru Ikegami

I はじめに

1. 研究の背景

関西福祉科学大学健康福祉学部健康科学科（以下、本学科と略す）では、大多数の学生は養護教諭を志望して入学するが、学業を積み重ねていくうちに一般企業等養護教諭以外の進路を選択する学生も現れてくる。学外実習の参加条件の厳格化（先修科目の設定、GPA：Grade Point Average に基準を設定）、養護教諭採用枠の先細りなどの要因もあり、今後その傾向は強まると予想される。

学科のカリキュラムは養護教諭養成に特化した科目が多いため、一般企業等を志望する学生にとって、どういった能力を伸ばせばよいのかを認識しづらい状況にある。教員側も学生の能力が把握できないために指導に行き詰る。

また、自身の将来の進路について迷う学生も多い一方で、大多数が養護教諭を目指す学科特性を考えた場合、養護教諭以外の進路を選択することが学生の不安や疎外感につながる懸念もある。

そこで学科として、養護教諭志望の学生に対しては教員に必要とされる能力や教員採用試験合格につながるような能力を、一般企業等志望の学生にとっては企業で必要とされる能力や就職試験合格につながるような能力を、それぞれ伸ばしていくための対策を検討する必要がある。

養護教諭を志望する学生、一般企業等を志望する学生、双方に共通して必要な能力とは何かと考えた時にまず考えられるのは、問題解決力、批判的・論理的思考力、コミュニケーション能力といった「ジェネリックスキル」が挙げられる。これは、文部科学省中央教育審議会（2008）¹⁾が定義する「学士力」、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」（2006）²⁾や「新・社会人基礎力」（2018）³⁾に相当するものである。

2. ジェネリックスキルの測定

ジェネリックスキルを測定するアセスメントテストの代表的なものとして PROG（Progress Report on Generic Skills）テストがある。PROG とは、河合塾グループの株式会社 KEI アドバンスと株式会社リアセックが共同で開発した、専攻・専門に関わらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向すなわちジェネリックスキルを育成するためのプログラムである。受験者数は日本全国で累計約 66 万人（2012 年 4 月～2018 年 7 月）、418 校の大学で実施されている⁴⁾。

PROG テストは、リテラシーとコンピテンシーの 2 つの側面からジェネリックスキルを数量化し評価するアセスメントテストである。PROG では、リテラシーとは「知識を活用して問題を解決する力」であり、習得した知識を活用することで育成されると定義されている。このリテラシーは問題解決力と言語／非言語処

受付日 2020. 9. 11 / 受理日 2020. 12. 2

*関西福祉科学大学 健康福祉学部 教授

理能力の2つの要素で構成される。さらに問題解決力は情報収集力・情報分析力・課題発見力・構想力の4つの要素に分けられる。一方、コンピテンシーとは「人と自分にベストな状態をもたらそうとする力」で経験を積むことで身に付いた行動特性であり、経験を振り返り意識して行動することで育成されると定義されている。このコンピテンシーは対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力の3つの要素で構成される。さらに、対人基礎力は親和力・協働力・統率力の3つの要素に分けられる。対自己基礎力は感情制御力・自信創出力・行動持続力の3つの要素で構成される。対課題基礎力は課題発見力・計画立案力・実践力の3つの要素で構成される。さらに、これら9つの要素は33個の細かな要素に分けられる。

尚、コンピテンシーの概念の定義については様々なものが存在するが(加藤, 2011)⁵⁾、本研究ではPROGの定義に従うこととする。

3. 本学科におけるジェネリックスキル育成のための対策と研究

これまで本学科として、ジェネリックスキル育成のために新たに正課のインターンシップ科目の開講等の対策を講じて来た。この科目は一般企業等志望と養護教諭志望の両方の学生が履修可能となっており、毎年2, 3年生20名程度が履修している。春学期の事前指導、夏休み期間中の企業等における実習、秋学期の事後指導といった流れのプログラムである。インターンシップの前後で自尊感情やセルフコントロールを比較した結果、インターンシップ後は自尊感情とセルフコントロールが上昇し、その効果が持続することが明らかとなった(福田ら, 2017)⁶⁾。

本学科では、2016年は1年生のみを対象に、2017年は1年生と2年生を対象に、2018年と2019年は全学年の学生を対象にPROGテストを継続的に実施してきた。2016年と2017年のデータをもとにジェネリックスキルと学業成績(GPA)の関連を調べた結果、リテラシーとGPAの間には関連が認められたが、コンピテンシーとGPAの間には関連は認められなかった(木村, 2019)⁷⁾。この結果は、リテラシーのみGPAとの間に正の相関関係がみられたというUchida et al. (2018)⁸⁾の知見、コンピテンシーとGPAの間には有意な相関を認めなかったという亀野(2017)⁹⁾

の知見と合致するものである。

また、ジェネリックスキルと心理的諸要因との関連についても検討を行ってきた(治部・福田・木村・池上, 2019)¹⁰⁾。そこでは、コンピテンシーと自尊感情、やり抜く力(Grit)、セルフコントロールといった心理的要因との間にそれぞれ正の相関が認められた。

さらに、これらの心理的要因とGPA、ジェネリックスキルおよび生活習慣との関連についても検討を行ってきた(福田・治部・木村・池上, 2020)¹¹⁾。その結果、睡眠時間と自尊感情、セルフコントロールとの間にそれぞれ正の相関があり、また自尊感情とセルフコントロールはともにコンピテンシーとそれぞれ正の相関があることが明らかとなった。

4. 目的

上述の通り、本学科において2016年から2019年の4年間継続してPROGテストを実施してきた。これにより、2016年入学生のパネルデータを用いて、1年次から4年次までの経年変化を分析することが可能となった。そこで、本研究では、学年経過に伴う学生のジェネリックスキルの変化を明らかにすることを目的とした。また、本学科の多くの学生が参加する養護実習に着目し、実習経験の有無によるジェネリックスキルの変化の差異についても検討を行った。

II 方法

1. 調査対象

2016年から2019年にかけて実施したPROGテストの受験者数の内訳は表1の通りであった。2016年は1年生のみ、2017年は1年生と2年生、2018年と2019年は全学年でPROGテスト実施した。このうち、1年次から4年次までの4年間分のデータが揃っている2016年入学生63名を調査対象とした。この63名のうち、3年次に養護実習に参加した学生は36名、参加しなかった学生は27名であった。また、参加しなかった学生27名のうち11名は4年次に実習に参加した。尚、4年間分のデータが揃わなかった(4年次に未受験であった)8名のうち、3年次に養護実習に参加した学生は3名、参加しなかった学生は5名であった。

表1 PROG テストの実施年度別、入学年度別の受験者数の内訳

| 入学年 | 学年 | PROG 実施年度 | | | |
|------|------|-----------|------|------|------|
| | | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 |
| 2015 | 卒後1年 | | | 69 | |
| 2016 | 4年 | 71 | 71 | 71 | 63 |
| 2017 | 3年 | | 76 | 76 | 76 |
| 2018 | 2年 | | | 61 | 59 |
| 2019 | 1年 | | | | 82 |
| 合計 | | 71 | 147 | 277 | 280 |

注：学年は2019年時点の学年を示す。

2. 調査時期

調査は2016年から2019年の4年間にわたって、毎年11月中旬から12月上旬かけて実施された。

3. 調査項目

調査項目として、ジェネリックスキルの測定する「PROG テスト」、自尊感情を測定する「自尊感情尺度」(山本・松井・山成, 1982)¹²⁾、やりぬく力を測定する「日本語版 Short-Grit 尺度」(西川・奥上・雨宮, 2015)¹³⁾、セルフコントロール力を測定する「日本語版セルフコントロール尺度短縮版」(尾崎・後藤・小林・沓澤, 2016)¹⁴⁾を使用した。また、大学における学びの成果を測定するための指標として、各学期のGPAを用いた。

PROG テストは、リテラシーテスト30問、コンピテンシーテスト251問(両側選択方式195問、場面想定形式56問)で構成される。回答はすべてマーク式である。リテラシーの総合評価は1から7段階、コンピテンシーの総合評価は1から7段階でそれぞれ点数化される。また、リテラシーの下位要素はそれぞれ1から5段階、コンピテンシーの下位要素はそれぞれ1から7段階で点数化される。いずれも点数が高い方がより望ましい能力を有していると評価される。

尚、ジェネリックスキルの経年変化を探ることが本研究の目的であるため、自尊感情尺度、日本語版 Short-Grit 尺度、日本語版セルフコントロール尺度短縮版およびGPAについては本稿では扱わない。

4. 手続きと倫理的配慮

PROG テストは問題冊子と回答用マークシートを用いて学年ごとに合同で実施した。テストの実施時間は、リテラシーテスト45分間、コンピテンシーテス

ト40分間であった。

本研究は関西福祉科学大学の研究倫理委員会の承認(承認番号17-09)を受けて行われた。調査対象者に対し、書面及び口頭で調査への協力を依頼し書面で同意を得た。

5. 分析

2016年入学生の1年次から4年次までのすべての時点のデータが揃ったケースのみを分析対象とした。

ジェネリックスキルの指標として、各学生のPROG テストのリテラシー総合得点および下位要素(情報処理力・情報分析力・課題発見力・構想力、言語/非言語処理能力)の各得点、コンピテンシーの総合得点および下位要素(親和力・協働力・統率力・感情制御力・自信創出力・行動持続力・課題発見力・計画立案力・実践力)の各得点を使用し、それらの平均値を算出した。また、学生を3年次に養護実習に参加した群(養護実習経験あり群)と参加しなかった群(養護実習経験なし群)に分けて各平均値を比較した。分析にはIBM SPSS Statistics Ver.24を使用した。

Ⅲ 結果と考察

1. リテラシーの経年変化

図1はリテラシーの経年変化を示している。リテラシー総合は1年次で高く(4.70)、一旦2年次に低下し(4.27)、3年次(4.43)から4年次(4.81)にかけて向上する。しかし、最大値は7であるので、まだまだ向上の余地が残されている。伊藤・石井・松村(2017)¹⁵⁾は工学部学生36名についてPROG テストを用いてジェネリックスキルの経年変化を分析している。その結果、リテラシー総合は、1年次は低く(3.46)、2年次でやや向上し(3.68)、3年次(3.63)から4年次(3.43)にかけて低下していた。また、山本(2013)¹⁶⁾の法学部学生123名の結果では、1年次(2.86)は低く、2年次(3.15)でやや向上し、3年次(3.11)で低下していた。しかし、本学科の経年変化はこれらとは異なっていた。そもそも、学生の学び(学修内容や授業形態の特性、臨地実習の有無、正課外活動への取り組み程度など)は大学・学部・学科・専攻によって大きく異なる。PROG テストの経年変化

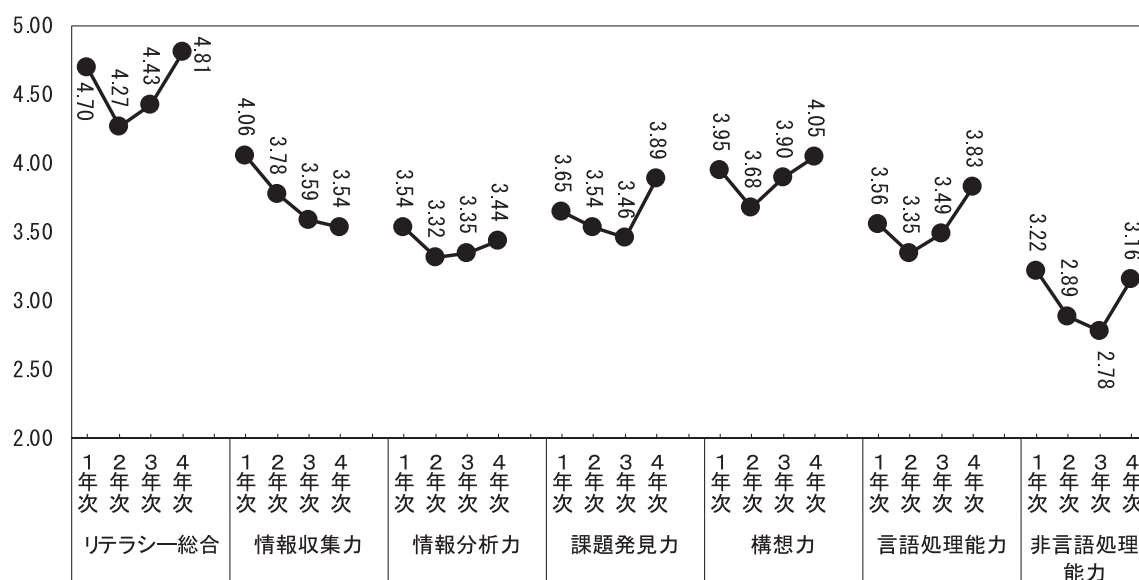


図1 リテラシーの経年変化
リテラシー総合は1から7点、下位要素は1から5点の範囲の値となる。

を検討した研究で論文化されているものは極めて少ない。よって、明確な根拠を示すことはできないが、報告会等での他大学の報告内容から判断すると、リテラシーは1年次から2年次にかけて低下する傾向があるというのは多くの大学にみられたようである。今回の結果でも、それと同様の傾向がみられた。

情報分析力・課題発見力・構想力・言語処理能力は、1年次から2年次にかけて低下し、その後3年次から4年次にかけて向上した。とくに構想力は2年次から3年次にかけての向上幅が大きかった。大半の学生は3年次の夏休み期間中（PROG テストの受験前）に養護実習を経験する。実習では保健指導のための指導案作成や媒体作成など構想力を問われる機会が多々ある。そうした経験を通して構想力が培われた可能性が考えられる。この点については後に詳述する。

課題発見力・言語処理能力・非言語処理能力は3年次から4年次にかけての向上幅が大きかった。学生のほぼ全員が4年次の春から夏にかけて教員採用試験や企業の採用試験を経験する。そこではSPI 試験やそれに類似した試験で言語・非言語能力が問われる機会が多々ある。それらの経験を通して言語・非言語処理能力が培われた可能性が考えられる。さらに、学生全員が3年次から4年次の秋学期にかけて卒業研究を経験する。自らテーマを設定し、実験や調査を通じてデータの収集・分析を行い、論理的に思考しそれを文章化する機会がある。この経験を通じて、課題発見力とともに言語・非言語能力が培われた可能性が示唆され

る。

図2は、養護実習経験あり群と養護実習経験なし群のリテラシーの変化を図示したものである。養護実習経験あり群には、養護教諭一種免許状の取得を希望し、学則に定められた条件（解剖生理学Ⅰ・Ⅱ、養護概説、看護学概論、看護技術Ⅰ・Ⅱ、救急処置Ⅰ、養護活動論Ⅰ、教職概論、教育原論、日本国憲法、人権教育の単位が修得済みであること）を満たしたうえで、事前指導、現場での実習、事後指導を経験した学生が該当する。2017年入学生以降は、これらの条件に加えて2期連続 GPA 2.0 以上であることが追加されたが、本研究の対象となる2016年入学生に関しては成績条件は存在しなかった。養護実習は養護教諭一種免許状取得のための必修科目である。一方、養護実習経験なし群には、養護教諭一種免許状の取得を希望しなかった学生、養護教諭一種免許状の取得を希望したが条件を満たせずに実習に参加できなかった学生が該当する。尚、経験なし群27名の中には、4年次で養護実習に参加する学生も含まれており、その経験は4年次のデータに反映されることとなる。また、両群の4年次のデータには、各学生の教員採用試験や企業の採用試験での経験が反映されることとなる。したがって、養護実習参加経験の有無による差異を検討するにあたり、1年次から3年次のデータで比較を行うのが妥当であるといえる。その点をふまえて両群を比較した結果、全体的にみて、養護実習経験あり群となし群でリテラシーの変化に差異はみられなかった。ただ

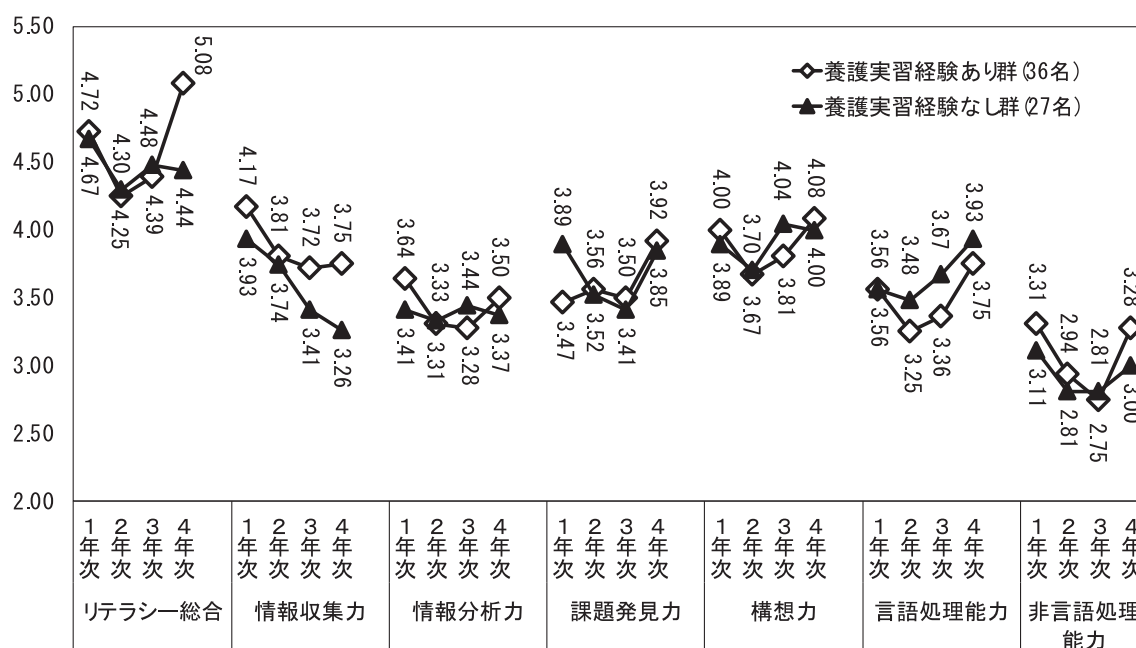


図2 養護実習経験あり群と養護実習経験なし群に分けてみたリテラシーの経年変化
リテラシー総合は1から7点、下位要素は1から5点の範囲の値となる。

し、情報収集力に関しては経験あり群と経験なし群で大きな差異がみられた。経験あり群と経験なし群は、ともに1年次から2年次にかけて同程度に低下しているが、経験あり群は2年次から3年次にかけてほぼ横ばいなのに対して、経験なし群は2年次から3年次にかけてさらに低下していた。経験あり群は、実習中に保健指導のための指導案作成や媒体作成などのために自分で資料を調べたり、実習先の教員等に助言を求めたりするなど情報収集活動を行う機会があるが、経験なし群はそのような機会はない。こうした機会（経験）の有無が情報収集力の差異の要因の一つとして考えられる。

先に、構想力は2年次から3年次にかけての向上幅が大きく、そこには養護実習の経験が影響している可能性があるとして述べた。しかし実際には、構想力の向上幅は、経験あり群と経験なし群で差異はなかった。養護実習に参加した学生のみならず、参加しなかった学生も、大学等での学びを通じて構想力が向上したといえる。

2. コンピテンシーの経年変化

図3はコンピテンシーの経年変化を示している。コンピテンシー総合は1年次（3.00）から2年次（3.14）にかけてやや向上し、3年次（3.60）で大幅に向上し、4年次（3.62）ではほぼ横ばいであった。最大値は7

であるので、まだまだ向上の余地が残されている。先の伊藤ら（2017）¹⁵⁾の結果では、コンピテンシー総合は、1年次（3.41）から2年次にかけて向上し（3.72）、3年次（3.65）でやや低下、4年次（3.73）で再度向上していた。この変化の傾向は今回の結果とは大きく異なる。しかし前述の通り、大学・学部・学科・専攻によって学生の学びが異なるので単純に比較はできない。

全体的に1年次から3年次にかけてコンピテンシーは向上するものの、4年次で横ばいもしくは低下する。PROGテストを実施した時期（11月頃）には、既に教員採用試験や就職活動が完了しており、履修科目数も少なくなり、学内で他者と協働する機会も減少する。コンピテンシーの向上に寄与するであろう経験の減少がコンピテンシーの低下の一因として考えられる。また、とくに対自己基礎力の低下が大きいことから、卒業研究に取り組む中で生じた不安や焦燥感の高まり、教員採用試験において望んでいた結果が得られなかったことによる自己効力感の低下、講師募集があるのか、自分は講師として採用されるのかといった就職を控えての不安の高まりなども影響していると考えられる。

親和力・協働力・感情制御力・自信創出力・行動持続力・課題発見力は2年次から3年次にかけて大幅に向上した。多くの学生が3年次の夏休み期間中

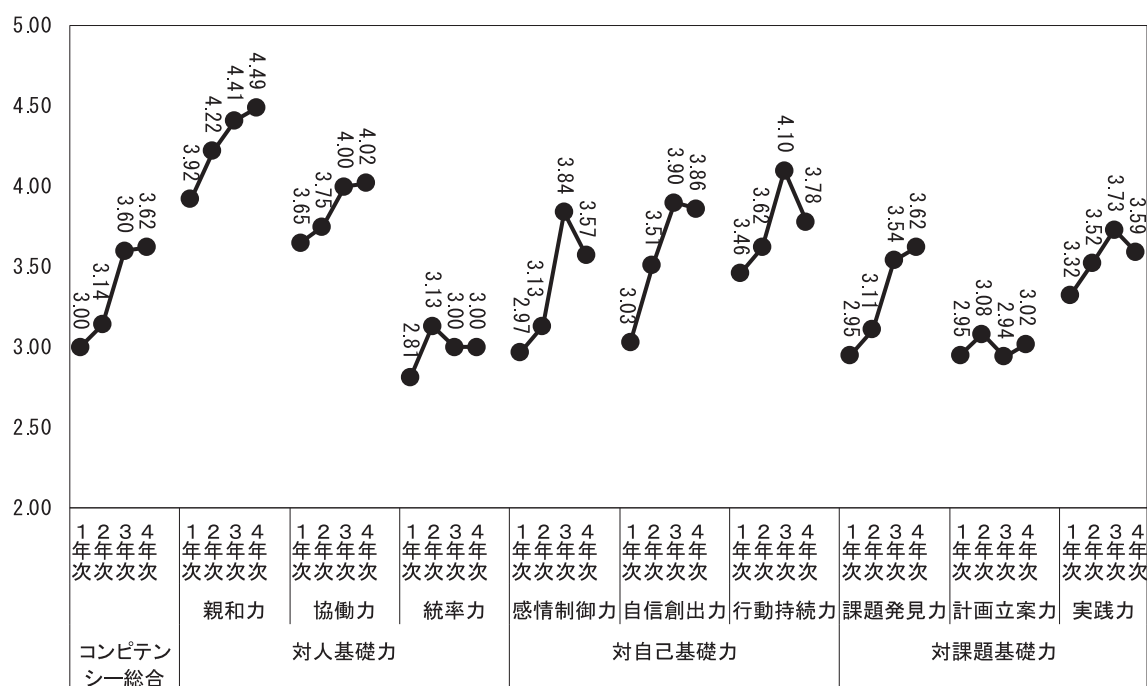


図3 コンピテンシーの経年変化
コンピテンシー総合は1から7点、下位要素は1から7点の範囲の値となる。

(PROG テストの受験時期よりも前の期間中)に3週間の養護実習に参加する。そこでは、実際の現場において、児童生徒に向き合い、他の教員と協働し、保健指導や授業等の課題に取り組み、実習をやり遂げることが求められる。そうした経験を通じて、これらの能力が培われた可能性が示唆される。そこで、養護実習経験あり群と養護実習経験なし群でコンピテンシーの変化を比較した(図4)。

まず、コンピテンシーは全般的に経験あり群のほうが経験なし群よりも高いことがわかる。しかも、1年次の時点(11月頃)で既にその差が表れている。経験なし群の学生は、コンピテンシーの低さ故に実習に参加できなかった(しなかった)のか、偶然コンピテンシーが低い学生が経験なし群に集まっただけなのか、今回の PROG テストの結果だけでは推察し難い。本学科では全学生を対象に学期ごとに進路や取得希望資格の調査を行っているが、2016年入学生の1年次秋学期時点の養護教諭免許取得希望者は全体の約9割を占めていた。このことから、経験なし群が1年次時点で養護教諭免許取得を断念し、養護実習への不参加を決めていたとは考えにくい。また、養護教諭免許取得希望者は全員がほぼ同じ科目を履修するので、学修機会が異なっていたとは考えられない。学科の学生は様々な高等学校から入学しており、それぞれの高等学

校での取り組みが入学年度時点のコンピテンシーに影響している可能性がある。今後は入学年度のコンピテンシーからの変化量を比較するなどして個人差を含めた違いについて詳細に検討していくことが必要である。参考までに、2017年入学生について、3年次に養護実習に参加した群(経験あり群40名)と参加しなかった群(経験なし群36名)の1年次のコンピテンシーを比較したところ、経験なし群が経験あり群よりも低いというわけではなかった。下位要素の1年次から2年次にかけての変化をみると、協働力・統率力・自信創出力・行動持続力・課題発見力・実践力は、経験あり群のほうが経験なし群よりも向上幅が大きかった。このことから、1年次の PROG テストの結果を参考として、養護教諭免許取得を希望する学生でコンピテンシーが低い学生に対して、上に挙げたコンピテンシー要素を中心に、早期からそれらを高めていくための教育指導が必要であるといえる。

次に、2年次から3年次の変化に着目すると、経験あり群はコンピテンシーが全般的に向上していた。高橋・関口(2011)¹⁷⁾は、経済産業省の社会人基礎力の12の能力要素について、理学療法学科学生を対象として臨床実習前後で比較を行い、実習後は各能力要素が向上することを明らかにしている。同様に、市川(2015)¹⁸⁾は看護学生を対象として看護実習前後で比較

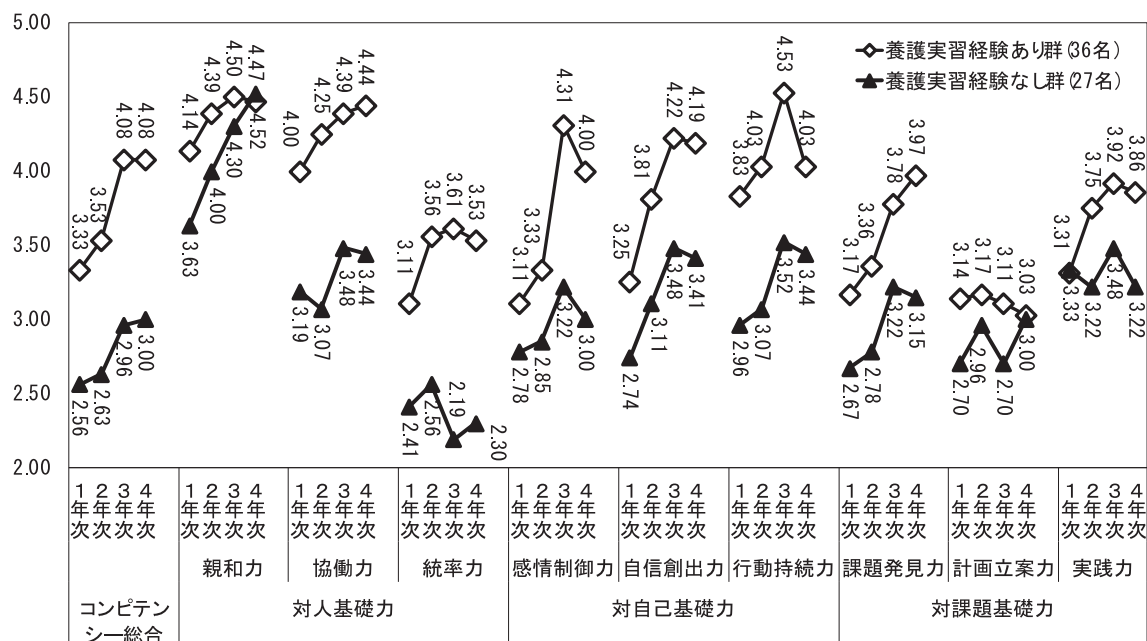


図4 養護実習経験あり群と養護実習経験なし群に分けてみたコンピテンシーの経年変化
コンピテンシー総合は1から7点、下位要素は1から7点の範囲の値となる。

を行い、古賀ら (2018)¹⁹⁾は歯科衛生学科学生を対象として臨床実習前後で比較を行っている。いずれも実習後は社会人基礎力のすべての能力要素が向上することを明らかにしている。使用されたジェネリックスキルの指標は異なるものの、これらの知見は本研究の結果とも整合する。つまり、現場実習を経験することでジェネリックスキルは向上するといえる。また、感情制御力は経験あり群のほうが経験なし群よりも向上幅が大きかった。養護教諭になることへの期待に対する負担、教師たちの態度に対する否定感情、未熟な養護技術に対する不安などのストレス (有村, 2000)²⁰⁾がかかる中で感情を制御しながら日々の課題に取り組む経験を通じて、感情制御力が培われたと考えられる。

他方、経験なし群は大半のコンピテンシーは2年次から3年次にかけて向上しているものの統率力や計画立案力は低下していた。経験なし群にとって、それらを培う機会が少なかったことが原因かもしれない。しかし、協働性・自信創出力・行動持続力・課題発見力・実践力については、経験あり群も経験なし群も同程度に向上している。これらの結果から、リテラシーと同様、養護実習に参加した学生のみならず、参加しなかった学生も、大学等での学びを通じてコンピテンシーが全般的に向上したといえる。とはいえ、経験なし群のコンピテンシーは経験あり群よりも全般的に低いので、これらを向上させる対策が必要である。一方

で、親和力は経験なし群のほうが経験あり群よりも向上幅が大きく、4年次では経験あり群と同程度になっていた。杉浦 (2000)²¹⁾は、中学生・高校生・大学生を対象として、拒否不安と親和傾向という2つの親和動機と対人的疎外感の関係を検討している。その結果、拒否不安と親和傾向は正の関係、拒否不安は対人的疎外感と正の相関、対人的疎外感と親和傾向は負の関係があることを明らかにした。この知見にもとづいて本結果を解釈すると、経験なし群の学生は、学科の大多数を占める養護教諭志望学生に拒否されたくないという気持ちの高まりから親和傾向が高まり、また、疎外されている感じを低下させるために親和傾向が高まったと考えられる。

IV まとめ

本研究ではジェネリックスキルの変化について養護実習経験と関連付けて検討してきた。全般的にみて、養護実習経験あり群となし群でリテラシーの変化に大きな差異はみられなかった。経験あり群となし群ともに、リテラシーは1年次で高く、2年次に低下し、2年次から3年次にかけて横ばいもしくはやや向上し、3年次から4年次にかけて向上していた。ただし、情報収集力に関しては経験あり群と経験なし群で大きな

差異がみられた。経験あり群は2年次から3年次にかけてほぼ横ばいなのに対して、経験なし群は2年次から3年次にかけてさらに低下していた。実習中で行う情報収集活動の経験の有無が、情報収集力の差異の要因の一つとして考えられた。しかし、両群ともにリテラシーにまだ向上の余地があった。教員採用試験や企業の採用試験での成果向上のために、リテラシーを向上させる対策が必要である。具体的には、山本(2013)¹⁶⁾が取り組んだように、課題解決のプロセスすなわち情報収集→情報分析→課題発見→構想→表現のサイクルを組み込むように授業内容を変える、あるいは新規に授業を作るといった対策が考えられる。前述の通りリテラシーは学業成績と正の相関があることがわかっている^{7, 8, 9)}。授業内容を工夫し、学生が日頃の学修に真摯に取り組み、学業成績の向上を目指すよう働きかけることが、リテラシーの育成につながると考えられる。

コンピテンシーは全般的に経験あり群のほうが経験なし群よりも高かった。しかも、1年次の時点で既にその差が表れていた。下位要素の1年次から2年次にかけての変化をみると、協働力・統率力・自信創出力・行動持続力・課題発見力・実践力は、経験あり群のほうが経験なし群よりも向上幅が大きかった。また、2年次から3年次の変化に着目すると、経験あり群はコンピテンシーが全般的に向上していたのに対し、経験なし群は大半のコンピテンシーは2年次から3年次にかけて向上しているものの統率力や計画立案力は低下していた。このように、経験あり群と比べて経験なし群のコンピテンシーは全般的に低く、これらを向上させる対策が必要となる。伊藤ら(2017)¹⁵⁾は、授業においては学生や教員とのコミュニケーションの機会を増やすことが、学生生活の諸活動においては何事に対しても積極的に取り組んでいくことが、コンピテンシーの育成につながる可能性があることを示唆している。さらに、コンピテンシーの低い学生に対して、様々な活動に積極的に取り組むよう働きかけることが必要であると述べている。また、亀野(2017)⁹⁾は、積極的、自発的な行動を心がけている学生や目標をしっかり持って努力している学生、海外に対する志向が強い学生ほどコンピテンシーが高く、一方で、勉強の熱心度や部活動・サークル活動、アルバイト、ボランティアなどとは関連性はみられなかったことを明らかにしている。

こうした知見を参考にしながら、授業においてはチームで取り組む問題解決学習(PBL: Problem-Based Learning)やプロジェクト学習(PBL: Project-Based Learning)を多く取り入れ、学生や教員とのコミュニケーションの機会を増やすといった対策が考えられる。これは、養護実習に参加する学生と参加しない学生の双方にとってコンピテンシーを培うために有効であると考えられる。また、養護実習に参加しない学生に対しては、正課のインターンシップ科目の履修や企業等での長期インターンシップ実習に積極的に参加するよう働きかけることも必要である。

今後の課題として、インターンシップ実習経験、教員採用試験の合否、企業就職者の内定時期等とも関連付けた分析を行い、その結果を可視化していく必要がある。そしてそれらの結果を、例えば、「養護実習に参加するためにはどの時期までにこういった能力をどのレベルにまで向上させる必要がある」といったように学生に分かりやすく提示することで、学生の日々の学修やジェネリックスkill向上への動機づけを高める取り組みへと繋げていきたい。そのためには、ジェネリックスkillの変化パターンによって学生を分類し、学修成績や心理的諸要因との関連も検討しながら、それぞれのグループに適した対策を練る必要がある。

最後に、本研究では養護実習の経験の有無に着目してジェネリックスkillの変化を探ってきたが、経験あり群となし群の間には、実習経験以外の経験の違いもあることを考慮しなければならない。そもそも養護教諭一種免許状取得を目指す学生と、そうでない学生とでは履修する科目が異なるため、学修機会もそれによって得られる経験も異なる。また、養護実習の経験の有無とは別に、正課内での学修経験、ボランティア活動やクラブ活動などの正課外での経験、アルバイト経験などジェネリックスkillに影響を与えられようとする要因は多くある。真に実習の効果を測定するためには、それらを統制した研究を行う必要となってくる。

謝辞

本研究は、関西福祉科学大学平成28年度・29年度・30年度・31年度共同研究費の助成によって実施されたものである。

【引用文献】

- 1) 文部科学省 (2008) 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて (答申)」,
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm. [2020 年 9 月 1 日閲覧]
- 2) 経済産業省 (2006) 社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」,
https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf. [2020 年 9 月 1 日閲覧]
- 3) 経済産業省 (2018) 「人生 100 年時代の社会人基礎力について」,
https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf. [2020 年 9 月 1 日閲覧]
- 4) リアセックキャリア総合研究所 (監修) PROG 白書プロジェクト (編著) (2018) PROG 白書 2018—企業が採用した学生の基礎力と PROG 研究論文集, 2-3, 学事出版.
- 5) 加藤恭子 (2011) 日米におけるコンピテンシー概念の生成と混乱 (組織流動化時代の人的資源開発に関する研究: 組織間協力と組織間人材移動をふまえた人材開発・育成・活動の問題を中心として), 産業経営プロジェクト報告書, 34, 1-23, 日本大学経済学部産業経営研究所.
- 6) 福田早苗・木村貴彦・治部哲也・松村歌子・長見まき子・山内彰 (2018) インターンシップ科目実施前後の学生の意識・心理的变化について, 総合福祉科学研究, 10, 9-16.
- 7) 木村貴彦・治部哲也・福田早苗・池上徹・山内彰 (2019) ジェネリックスキルの客観的評価と GPA の関係についての検討, 総合福祉科学研究, 11, 1-5.
- 8) Uchida Ryuji, Kodama Jun, Maruta Michito, Okamoto Fujio, Kawaguchi Tomohiro, Ohgi Kimiko and Ishikawa Hiroyuki (2018). "Generic Skills Measurement of Students at Fukuoka Dental College: The Usefulness of the Progress Report on Generic Skills (PROG) Test", Research & Reviews: Journal of Dental Sciences, 6(1), 10-18.
- 9) 亀野淳 (2017) 大学生のジェネリックスキルと成績や就職との関連に関する実証的研究: 北海道大学生に対する調査結果を事例として, 高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—, 24, 137-144.
- 10) 治部哲也・福田早苗・木村貴彦・池上徹 (2019) 大学生のジェネリックスキルに関わる心理的要因の検討, 第 25 回大学教育研究フォーラム発表論文集, 111.
- 11) 福田早苗・治部哲也・木村貴彦・池上徹 (2020) 大学生のジェネリックスキル・成績と生活習慣及び心理的要因の検討, 日本心理学会第 84 回大会抄録集, PR-017,
<https://www.jpap2020toyo.com/posters>. [2020 年 9 月 1 日閲覧]
- 12) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 13) 西川一二・奥上紫緒里・雨宮俊彦 (2015) 日本語版 Short Grit (Grit-S) 尺度の作成, パーソナリティ研究, 24(2), 167-169.
- 14) 尾崎由佳・後藤崇志・小林麻衣・沓澤岳 (2016) セルフコントロール尺度短縮版の邦訳および信頼性・妥当性の検討, 心理学研究, 87(2), 144-154.
- 15) 伊藤雅・石井義裕・松村直樹 (2017) ジェネリックスキルの経年変化に関する考察: —大学生パネルデータの 4 年間の分析—, 工学教育, 65(5), 8-13.
- 16) 山本啓一 (2013) 大学生の学ぶ意識を引き出すジェネリックスキルの育成と評価—リテラシー育成を主眼に置いた初年次教育の取り組み—, 河合塾 PROG 大学の活用事例 2013 年度,
https://www.kawaijuku.jp/jp/research/prog/pdf/2013_kyushukokusai.pdf. [2020 年 9 月 1 日閲覧]
- 17) 高橋晃弘・関口春美 (2011) 臨床実習が社会人基礎力に及ぼす影響について, 第 46 回日本理学療法学会大会抄録集,
https://www.jstage.jst.go.jp/article/cjpt/2010/0/2010_0_GcOF1119/_pdf-char/ja. [2020 年 9 月 1 日閲覧]
- 18) 市川裕美子 (2015) 看護学生の実習前後における社会人基礎力の自己評価, 八戸学院短期大学研究紀要, 41, 39-49.
- 19) 古賀恵・永田英樹・大岡知子・中本千朱佳・谷本愛沙未・惣田彩季・木村重信・岸光男・大嶋隆 (2018) 本学歯科衛生学科生の社会人基礎力育成に対する臨床実習の効果, 関西女子短期大学紀要, 28, 33-38.
- 20) 有村信子 (2000) 養護実習生のストレスに関する研究 (1) 実習ストレスの分析, 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 30, 31-41.
- 21) 杉浦健 (2000) 2つの親和動機と対人的疎外感との関係, 教育心理学研究, 48(3), 352-360.